

一生メンテナンスしますよ（2016年2月号）

～お客様に永く使っていただける、よい家具をつくる会社であり続けるために～

株式会社中村木工所は、時代とともに扱う木製品を少しずつ変化させながら、80年以上の歴史を重ねてきました。3代目社長の中村和秀さんは、仕事に対してこだわりを持ちながらも、他の経営者さんから学ぶべきことは柔軟に取り入れています。大量生産では実現不可能な、お客様に合ったよい家具を提供する会社であり続けるために、現状に甘んじることのないよう自分を奮い立たせるのだという中村さんにお話をお聞きしました。



(株)中村木工所
代表取締役
中村 和秀氏



切削作業場

●時代とともに取扱い製品を変えながら

中村さんのお祖父様が昭和2年に三国で創業し、80周年を超えました。基本的には木製品なので、極端に変わってはいませんが、扱う製品は時代とともに変化してきています。

創業のころには、近くにアルミサッシの工場があって、機械や材料を運ぶためのパレットや、ほかに下足箱や押し入れの棚板などをつくったり、建設業者に入り込んで、大工仕事や左官仕事などもしていたようです。

経営手腕があったというお祖母様のときに現在の場所に移転しました。当時、家賃収入用に建てた文化住宅は現在、食堂と休憩所として利用しています。

その後、ホテルや大型商業施設の店舗関係の受注が多かった時期のあと、震災があり、耐震補強工事関連が入り始めました。耐震補強工事によって壁の厚みが増すため、既存の家具が邪魔になり撤去されます。その撤去した部分の新設工事や、鉄骨プレスを隠したり囲ってしまう工事であり、オーダーでしか対応できません。それらが一段落した後、病院、学校、幼稚園、老人ホームの建設が増えたことに伴って、幼児用ロッカーや居室の収納家具、受付カウンター、下足箱などのオーダーを受けています。



チーク無垢板の玄関プレート



事務所風景



中村木工所資材置き場

●別注家具屋としてのこだわり

従業員の方たちは以前、建築現場で家具工事をしていたため、別注家具として納めにいくときのことを皆で試行錯誤しながら考えてきました。工事の際には、エレベーターから通路まで全て養生します。たとえテレビボードを一台付けるだけでも、部屋にはマットを敷きつめ壁にはビニールを貼って、道具や商品を持ち込みます。お客様がマンションを購入されたのなら、新品です。絶対に傷をつけてはいけません。完璧な養生が必要です。なかなかそこまでやってくれる業者さんは少ないということで、ご指名があるそうです。

建築家具工事を中村木工所に頼みたいと思っていてくれるところはあっても、海外でつくっているような他の業者さんに比べたら高くなります。建築の仕事は予算ありきなので、値切られて受けることもあるそうですが、そんなときでも、決して手を抜かずに行っているのは、皆で決めています。

例えば幼稚園のロッカーなどは、先生方のご意見では角を丸めてもらわないと子どもたちが怪我をするという心配があるそうです。建築会社の決めている予算の範囲ではそれは不可能ですが、実際に使う現場におられる先生方のご意見は100パーセント聞き入れられるように、何とか工夫しています。「最終的に納めたときによかったと言っていたいただけることが我々の喜びです」と中村さんは言います。

●「あのメンバーが来てくれるのか」

利潤追求からは遠ざかってしまうのですが、こうしたこだわりをもって仕事をしていることで、ようやく大手ゼネコンや街の建築会社の上層部の方から「中村に頼め」と言われるようになってきました。

一番若い社員が35歳で、中学を卒業して20年。そのほかは皆、社歴20年以上の選手。中には40年を超えている社員もいて、その5人でやっています。どの現場にも同じメンバーで行くため、先方とも顔なじみになり、安心につながります。

中村さんのお父様が社長のころは平均年齢50、60歳くらいでしたが、技術を引き継ぎ、少し若返っています。

●今の一番の悩みは、技術の継承事業継承

「何名か採用はしていますが、なかなか長続きしないです」という中村さん。入社してくる20歳そこそこの新人は、一番若い30代の社員と年齢的には10歳くらいの差ですが、技術的には全く違い、その差を埋めるには間が開き過ぎてしまっているそうです。新人を入れるのなら、いついつに入れると決めておいて、皆で受け入れ体制をつくって迎え入れるということをしていかないといけないと思っています。

2、3年前に苦い経験があります。5年間ほど勤めた女性が辞めてしまうことになりました。彼女は、大学卒業後ものづくりがしたいと自作のものを持参して入社を希望してきました。センスもよく、女性らしい面のづくりがやわらかい仕上がりの家具をつくれる、一人前の職人さんになっていました。しかし、徐々に工場のほかのメンバーとの間でいろいろな問題が起きていて、そのことに中村さん自身が早く気付いてあげることができませんでした。彼女が長く活躍できるようにもっと考えてあげるべきだったと悔やんでいます。

中村さんは、70少しくらいで息子さんにバトンタッチするとして、工場のほうは現在の一番若手の人が60歳前くらい、そのころほかに3人4人くらいが技術継承できている状態にするとしたら、逆算してここ4、5年で、新人を迎え入れる体制をつくらなければいけないと考えています。

●同友会では、人のつながりができる

同友会はいろいろなことをしていますから、それぞれに評価はありますが、総合的にみて、人のつながりができるということが大きなことです。ネットワークというのではなく、人のつながりです。それによっていろいろ知識も入ってくるようになります。中村さんは最近そのことがわかってきたそうです。

また、同友会会員の中には、自分が悩んでいることを、簡単にやってのけている人がいたりします。そういう人の話は聞きたいと思いますし、失礼な言い方ですが、ずっと注視してその後どうなっていくのか、観察させてもらうことができると、中村さんは言います。

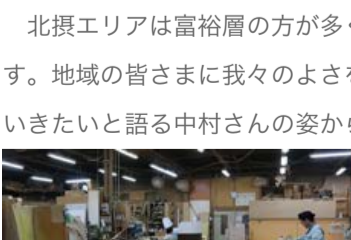
一人でつぶしる親方タイプの経営者は多いでしょうが、それではうまくいきません。しくみづくりが大切です。

●自分たちのよさをきちんと伝えられるように

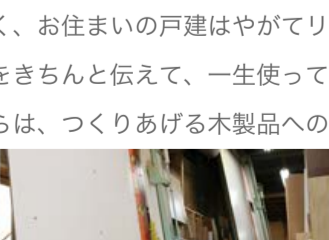
リフォーム関連のテレビ番組などは、専門知識があるだけに気になることが多くて、見るのは好きではないけれど、番組のつくり方から学ばなければいけないと思うところはあるそうです。

使う人が求めていることに対して、自分たちならもっと素晴らしいものをつくれる技術があるのだということを、きちんと伝えていけるようにしなければと思っています。

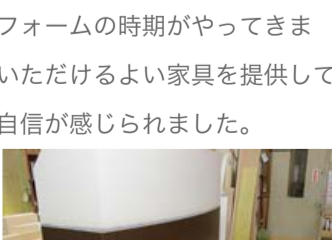
北摂エリアは富裕層の方が多く、お住まいの戸建はやがてリフォームの時期がやってきます。地域の皆さまに我々のよさをきちんと伝えて、一生使っていただけるよい家具を提供していきたいと語る中村さんの姿からは、つくりあげる木製品への自信が感じられました。



組立の作業場



大型切断機パネルソー



製作中カウンター

取材／西岡・荒田（写真）・北川（文） Profile

企業名：株式会社 中村木工所

所 在：大阪府豊中市曾根南町

創 業：昭和2年2月

資本金：1,000万円

社員数：7名